令和８年度
茅野市非核平和事業

「広島平和の旅」感想文集



令和８年９月
茅　　野　　市

はじめに

本市が平成５年度から実施している非核平和事業「広島平和の旅」も、今年で31回目となりました。

原爆投下から81年目の夏を迎えた今年は、市内４中学校で「原爆パネル展」と非核平和学習を行い、これをもとに非核平和作文コンクールを実施しました。そして、全ての中学２年生の中から最優秀賞を受賞した８名の生徒を、８月５日から７日までの日程で広島に派遣しました。

この旅では、原爆が投下された８月６日に行われる平和記念式典への参列のほか、被爆者の方から直接体験談を聞いたり、平和記念資料館を見学したりしました。生徒の皆さんは、被爆地広島での貴重な体験を通じて、今まで学校で学んだこと以上に、戦争や原爆の恐ろしさ、そして平和の大切さを身にしみて感じたのではないかと思います。

また、広島を訪れる前に比べて、一人ひとりが『２度と戦争を起こしてはいけない』という気持ちをより一層強くしたのではないでしょうか。

今回広島を訪れた８名の中学生が感じた想いをここにまとめました。この想いをいつまでも忘れずに、平和への取組を今後も続けていきましょう。

令和８年９月
茅野市　総務部　総務課

目　次

		ページ
永明中学校	２年１部　松澤　蒼太	2
〃	２年３部　小松　祐生	3
北部中学校	２年２部　中西　桐吾	4
〃	２年３部　伊藤　一穂	5
長峰中学校	２年３組　鷹野　柚珠奈	6
〃	２年３組　武井　唯華	7
東部中学校	２年２組　内藤　恭花	8
〃	２年３組　五味　芯太郎	9
平和への誓い（令和８年広島平和記念式典より）		10

永明中学校　２年１部　　松澤　蒼太

1945 年８月６日。地獄のように焼け野原になったヒロシマの道を走る一台のトラック、その荷台には生死を問わず何人もの人が次々と積み込まれた。これは、証言の集いで、実際に二歳で被爆した方が語られた話だ。僕はその話の中で、何度も気が狂いそうになった。これまで教科書や写真では知り得ない、生々しく残酷な現実がそこにあったからだ。だが、これは当時本当に起こったことだ。原爆は一瞬にして人々の日常を奪い、夢や未来、そして人間性を喪失させてしまう。このお話をしてくれた方は、言葉を詰まらせながらも、同じ事を繰り返したくないという強い思いを僕達に伝えてくれた。その一つ一つが、僕の胸に強く突き刺さった。

時計の針を、その前日に巻き戻す。

８月５日。広島に着いた僕達は路面電車にのって平和記念公園まで移動した。公園の周辺には大きなアーケード街があり、活気のある商店街が広がっていた。僕はその美しい町並みにすっかり夢中になっていた。広島は何度でも来たいと思うほどに魅力的で、活気にあふれていた。だが、そんな高揚した気持ちも、平和記念公園に足を踏み入れると、何もかもが様変わりした。

一歩公園に入ると、それまでの都会の喧騒が消え去り、どこか張り詰めた空気が漂っていた。目の前に現れた原爆ドームは、鉄骨を青空に剥き出しにしたまま、あの日から時間が止まったかのように佇んでいた。その力強い姿は、過去に何が起きたか無言で訴えかけるようだった。

平和記念資料館の中に入ると、僕の心はさらに激しく揺さぶられた。特に忘れられないのは、原爆で亡くなった人々の悲惨な遺体の写真だ。かつては僕たちと同じように笑い、泣き、大切な人と過ごしていたはずの人間が、一瞬にして骨の塊に変えられてしまった。そのあまりにも惨い光景に、息が詰まるような衝撃を覚えた。「人が人として死ねない」本当にその通りだと思った。

被爆者の方々の平均年齢は年々上がり、直接話を聞ける機会は残り少なくなっている。だからこそ、八十一年という歳月が流れた今、その記憶を風化させてはならない。あの日トラックに積み込まれた人々の無念や、生き残った人々の苦しみを、僕たちは想像し続けなければならない。

「同じことを繰り返したくない」という被爆者の方の願いを実現させるために、僕たち若い世代ができることは何だろうか。それは、広島で感じた恐怖や悲しみを決して忘れず、周りの人へ、そして次の世代へと語り継いでいくことだ。平和は誰かが与えてくれるものではなく、僕たちの手で守り、作っていくものだ。広島の美しい街並みと、あの日流された涙を忘れない。あの町の下にはまだ無数の人が眠っている。どんなにつらい現実があっても目を背けず、僕は平和を願う一人の人間として、未来へ向かって歩みを進めていく。

永明中学校　２年３部　　小松　祐生

広島を訪れた私は、平和を「生きること」だと定義づけた。与えられた命を粗末にせず全うし、あらゆることに全力で興味関心を抱くことを自分に誓う。価値観の異なる友人の意見に耳を傾け、尊重できる人間でありたい。

五日の朝。ドキドキする緊張を、「五感を使って自分なりの平和を感じ取ってきたい。」「七人の友達と仲良くなりたい。」というワクワクする期待が上回り、心高ぶらせて出発した私。特急しなの・新幹線のぞみを乗り継いで広島の地に到着した時、真夏の暑さと共に、翌日に平和式典を控えた広島の街の強いエネルギーを感じた。平和記念資料館は熱気に包まれ、日本人のみならず外国人の方も多数おり、食い入るように写真やパネルや展示品に見入っていた。私の目にはその真剣な眼差しから、世界中の人々が各々の立場や視点で恒久平和を願っているように映った。この旅の前に、本・新聞・TV 等を用い事前学習を重ねてきたが、情報量の多さに加えて混雑する館内で、これでもかという位むごたらしい現実を次々と突きつけられて複雑な感情が込み上げてきた。「原子爆弾の恐ろしさは認知されているのに、なぜいまだに核廃絶、核保有国ゼロとならないのだろうか。」と。

気持ちを引き締めて迎えた六日早朝。平和記念公園は、数々の思いを胸に集まった世界中の人々を静寂に包んだ。戦争・核・平和といった大きなテーマに対して深く考える姿がそこにはあった。広島市長の「争いが起きない世界を創るため、自分の中の争いの心を乗り越え、相手の考えを受け入れる気持ちを持ってほしい」には心動かされた。また、こども代表の「被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります」には、「一人一人があらゆる暴力を否定し、核兵器廃絶という理想を理想で終わらせない国際社会を創り上げるため」私達若者の力は必要不可欠だと痛感した。私の伯父は広島に動員された際に被爆し、戦後小さな幸せを噛みしめ教員に復職した最中、白血病で亡くなった。いつも仏壇上で見守ってくれている伯父の話を改めて祖父から聞く機会に恵まれ、教育者・人として愛され惜しまれた伯父の叫びが私には聞こえるようだ。更に、中学校の平和学習で佐々木禎子さんについて学んだ。千三百羽以上の折り鶴に「生きたい」と願いを込めこの世を去った彼女をモデルとした原爆の子の像は平和な未来への橋渡しをしているように見えた。

しかし、現実は厳しい。戦争や紛争が絶えない。私は、誰もが幸せな日々を実現するため、多大な犠牲を払う戦争や核保有には断固反対する。核で核を抑える核抑止論に依存しない安全保障の模索や、核兵器禁止条約等核保有国の論理を超える枠組みについて議論が一層深まることを願う。ちっぽけな存在かもしれないが、私は私なりの平和の輪を広げられるよう、周囲への思いやりと愛を忘れず、平和な社会を後押しする決意である。

北部中学校　２年２部　　中西　桐吾

私たちが暮らす現代の日本は、物資に恵まれ、戦争の恐怖に怯えることもない平和な社会だ。しかし、この平和は決して当たり前のものではない。そのことを強く実感させられたのが、今回の広島平和の旅だった。教科書や映像のなかでしか知らなかった「ヒロシマ」という歴史の舞台に立ち、自分の目で見て、耳で聴き、肌で感じることで、私の平和に対する意識は大きく変わった。

旅のなかで最も強く心に刻まれたのは、やはり平和記念資料館での見学だ。館内に展示されている、黒焦げになった三輪車や、ぼろぼろに裂けた衣服、そして犠牲者の遺品や写真の数々は、あの日、あの瞬間にどれほど凄惨な出来事が起きたのかを無言で訴えかけていた。それまでは「一九四五年八月六日、原子爆弾投下」という歴史の事実として記憶していた言葉が、突如として、生々しい痛みと悲しみを持って私に迫ってきた。一瞬にして数多くの尊い命が奪われ、生き残った人々も生涯にわたり放射線の強い後遺症に苦しみ続けた。その理不尽さと残酷さに、胸が締め付けられるような思いをした。

また、語り部の方から直接、当時の貴重な体験談を伺う機会があった。静かな、しかし力強い言葉のなかに、戦争の恐ろしさと、二度と同じ過ちを繰り返してはならないという強い決意が込められていた。平和を守るということは、単に戦争をしないことだけではない。過去に起きた悲劇から目を背けず、それを未来の世代へと語り継いでいくことなのだと、強く教えられた。

夕方に訪れた平和記念公園では、原爆ドームが夕日に照らされていた。鉄骨がむき出しになり、崩れかけの壁を残すその姿は、かつての惨禍を今に伝える生きた証人だ。しかし、その周囲には美しい緑が広がり、元安川には穏やかな水が流れていた。かつて「七十五年間は草木も生えない」と言われた広島が、人々の懸命な努力によってここまで復興を遂げた姿に、人間の持つ底知れない生命力と、平和への強い執念を感じずにはいられなかった。

この旅を通して、私は自分自身のこれまでの生活を深く反省した。世界では今なお紛争が続き、多くの人々が苦しんでいる一方で、私は日々の小さな不満に目を奪われ、平和のありがたみを忘れていた。広島で学んだことは、決して過去の歴史の勉強だけで終わらせてはならない。

いま、私たち若い世代にできることは、まず正しい歴史を知り、周囲の人々と対話を重ねることだ。些細な対立や偏見をなくし、他者を思いやる気持ちを持つことこそが、世界平和へつながる第一歩だと確信している。広島の地で誓った平和への願いを胸に刻み、これからの未来を生きる一人の人間として、自分にできる小さな行動を積み重ねていきたい。

北部中学校　２年３部　　伊藤　一穂

小学五年生の時、国語の『たずねびと』を読んで、そこに出てくる「土まんじゅう」を見たいと思い、広島を訪れた。そこでたくさんの人が平和記念資料館に並んでいるところを見て、「これだけ多くの国の人がここを訪れているのになぜ戦争はなくならないのだろうか」という疑問を抱いた。二日間いろいろなところを見て回るうちに、私は「ここにいる人たちは、ここで何が起きたのかを知るために広島に来ているのだ」と自分なりの答えを出した。

中学二年生になり、小学五年生の自分とは違う視点で平和について学ぶと目標を決め、広島へ向かった。

広島に着いてすぐ、三年前は人が多すぎて諦めなければならなかった平和記念資料館を訪れた。一つひとつの写真や絵をゆっくり見ていく、と目を逸らしてしまいそうなほど悲惨な絵や写真がたくさん並んでいた。どれだけ苦しかったのか、見るだけで伝わってくる。

二日目の「８・６証言の集い」は小グループで部屋ごとに分かれて被爆者の方のお話を聞く。私は二歳で被爆された土居さんのお話を聞いた。お母さんと二人で家を目指したお話の中で、「道いっぱいの死体が、自分の心を破壊してしまいそうだった」と聞いた時には、頭が真っ白になってしまった。土居さんは声の強弱や、身振り手振りをつけて分かりやすくお話をしてくれた。原爆の証言をテレビで観たり本で読んだりするのと、直接あの日にあったことを聞くのでは、大きく違った。

土居さんが、お話の前に、証言を聞く部屋についてこんなことを言っていた。「昔は十部屋以上あったけど、最近は少なくなって八部屋になってしまった。」つまり、証言をする人が減ってしまったということだ。この話を聞いてこれから自分たちがやるべきことが分かった気がした。私たちは、被爆者の方から直接お話を聞ける最後の世代かもしれない。

今回の貴重な体験を家族や友達に伝えること。これが私たちにできる小さな一歩だ。ただ大事なのはその次の二歩目、三歩目、伝えた後どうするかだ。 八十一年前の広島の事実を二度と繰り返さない、明るい未来を創っていけるのは私たちしかいない。その覚悟が心に灯った。この覚悟の灯を絶やさずに行動することが、大人になっていく私たちにできる大きな一歩だ。

二泊三日の広島の旅を思い出す時、忘れられない景色がある。華やかでどこか儚く、不思議なくらい美しかった、八月六日の夜の灯篭流しだ。前に写真で見たことはあったが、実際にこの目で見ると、たくさんの人の想いが灯っていることを感じて胸がいっぱいになった。

八月六日の広島の空気をこの肌で感じたこと、八十一年前の惨状の遺産をこの目で見たこと、あの日の証言をこの耳で聴いたこと、灯篭流しの景色をこの心に焼き付けたこと。

私はこの夏を忘れない。

私からつなげる過去

長峰中学校　２年３組　　鷹野　柚珠奈

広島平和の旅に参加して、ふだん学校の授業では学べない現実を見れました。目をふさぎたくなる場面ももちろんありました。資料館では、当時の写真、三輪車などたくさんありました。原爆が落ちる直前まで、笑顔であふれていた小学校。お母さんが作ってくれたお弁当を楽しみにしていた学生。どれも 81 年経った今でも、当時の笑い声が聞こえてくるんじゃないかとあわい期待を持つ人もいるでしょう。広島についてから、私は今もずっと助けを求める声。親や自分の子供をさがす人の声が私の耳に届いてくるような感覚でした。81 年経ち、町は明るく元通りに戻った今でも被爆者の心は元に戻ることなく今まで過ごしています。時代が進むにつれ、原爆のせいで病気をわずらい生きる希望すらもなくなった人も神からあたえられた生きるという選択肢しかない。今も苦しみながらも、今を生きる私たちに原爆の辛さを伝えてくれています。

改めて私が感じたのは、こうして友達と過ごし親とけんかする日はいつしか人によってこわされてしまうんだなと感じました。けんかはよくないと小さい時から教わったことは規模が大きくなると多くの方の命、未来、生きる希望をすべてうばっていきます。広島は原爆が落ちて 81 年が経つ今も、原爆のひどさを伝えています。私たちはその辛さを語り続ける１人にならないといけません。平和式典では、話す方みな平和を願っていました。平和は１人で願っても平和は訪れない。だからこそ、日本そして世界中協力していくんじゃないか。そう伝えてくれました。平和になる世の中にするには、私たち中学生でもできます。みんなで手を取りあって意識をしていけば今よりももっと平和になると心の底から感じています。ここにいるみんなから学校などで伝えていけば何年たっても、平和はみんなから広がっていくはずです。

みんなで見た灯篭流しは、生きてきたなかで一番きれいでした。各学校の生徒を代表して思いを流し、この景色は二度と忘れません。原爆ドームも昼間と夜では印象が 360 度変わりました。昼間は二度と原爆を落としてはいけないと伝えてくれる大切な証拠。夜は、被爆者の方の思いが集まり簡単にいえばとてもこわく見えました。それを全部見たことを伝えていきたいです。

最後に、教科書、ネットじゃわからなかったことをこの目と耳を使って学んできたことを全部自分よりあとの世代、前の世代にも伝えたいです。原爆の辛さを忘れてはいけない。忘れていけない過去は私からつなげていきたいです。

未来

長峰中学校　２年３組　　武井　唯華

私は平和の旅に行き頂いた機会を通して当時の出来事についてたくさん学びました。広島には現地に行かなければ分からない声や雰囲気がありました。

資料館、原爆ドーム見学、講話、式典、灯篭流し、証言の集いなどとても貴重な体験をさせて頂き、原爆が及ぼした様々な被害に触れ人々の叫び、そして人々が祈り続け今の広島をつくり上げてきたその歴史をこの身に感じました。その上で私なりにどうすれば世の中が平和になるのか、平和とは何なのかを考えました。

私が考える平和な世界とは、人が人に悪意をぶつけることがなく、人々が互いに思いやり笑顔に満ちている世界です。でも現状の今の世界では、戦争をしている国や核兵器の開発を進めている国があります。それだけ聞けば、自分には関係のない話だと思う人も居ると思います。広島や長崎の原爆のことだってそう感じている人は居ると思います。でも、これらは全部他人ごとじゃなくて自分達のことです。もし原爆が落とされた場所が自分達の住む町だったら？もし現代でまた原爆が落とされたら？当たり前の日常がある日突然壊れたら？当時もそうだった。当たり前に誰かと話していたのに、笑い合っていたのに、突然それが壊された。たった一発の、人の手によって作られ、人の歴史と意志によって落とされた兵器によって。笑顔は消え去り、大切な人達を失った。その後の生活も苦しかった。身体的苦痛もあった。でもそれだけじゃなく心が苦しかった。被爆者の方達は当時ひどい差別を受けたそうです。それらの苦痛は全て人間が生み出したものです。兵器を作ったのも人間、戦争を始めたのも人間、差別したのも人間。私達が今生きているこの日常は当たり前じゃない。もろくてすぐに壊れてしまうかもしれない。日常の中のささいな幸せが穏やかな時間をつくり平和をつくっていく。みんながそのことを理解すれば日々を大切にしながら生き、穏やかな時間が流れるんじゃないだろうか。平和というものは自分達のすぐそばにあり、自分達で育んでいくものです。平和な世界をつくるにはそれを知ってもらうことから。そして知ってもらうためにみんなに話すのが実際に広島に行って学んできた自分の役目だと思いました。

友達と笑って話ができるのも、おいしいご飯が食べれるのも全部当たり前なんかじゃない。その全てが幸せなことで、その全てで平和な未来がつくられる。過去の事を過去だけで終わらせずもう二度と繰り返さない。一人一人が日々を大切にし、ささいな幸せから未来をつくる。そのために自分達が周りの人に伝えていく。平和な未来を自分達からつくっていきたいです。

被爆地を訪れて学んだ現実

東部中学校　２年２組　　内藤　恭花

私は、広島に行って多くのことを学んできました。私の想像とはかけ離れた原爆の真実が、そこにはありました。

まず、平和記念資料館で写真や映像から見た現実です。鮮やかな赤が空一面に一瞬にして広がる光景。皮膚がただれながらも一心に走り続ける人。柱の下敷きになった母の助けを求める子供。その近くまで迫ってきた炎。病院にも多くの患者が押し寄せてきました。全身に火傷を負った人。血を吐きながら亡くなった人。その多くが、私には重すぎる様子でした。

次に、現存している物達から見た現実です。黒焦げになった三輪車。変形した弁当箱。被爆した方が着ていた血の滲んだワンピース。剥き出しになった原爆ドームの鉄骨。当時みんなに親しまれていた緑色のドームは、今では形が崩れて骨組みが丸見えの原爆ドームへと変わってしまいました。実物から感じる痛々しさは、私の記憶に深く刻み込まれています。

最後に、被爆者やその家族の方から聞いた現実です。「腕の肉が見えていても、痛いとは言わなかった。」「お父さんのことは産まれてから一度も見たことがない。だから、俳句を通じてやっと繋がれた気がした。」などと話してくれました。その話し方や表情は、かえって私を辛くさせました。

他にも多くの悲しい真実を学びました。ですが、私が学んだことは暗いことだけではありませんでした。それは、原爆の悲惨な様子を知り、心を痛めている人が沢山いたことです。手を合わせながら資料館を歩く年配の方。展示物を見ながらハンカチで口元を抑える人。子供に展示品の説明をしているお父さん。読み上げ機能を活用しながら見て歩く外国の方々。式典に参列し、花を捧げていく多くの人々。老若男女、国籍問わず、そこにいる全ての人が八十一年前の現実に思いを馳せていました。その光景を見て、八十年以上経った今でもこれだけ多くの人が興味を持っていることに心を打たれました。

私はこの広島の旅に参加したことで、実際に起きた多くの事実を知ることができました。その中には悲しい過去や悲惨な現実が沢山ありました。実際、今でも後遺症に悩んでいる人もいます。一方で、世界には核保有国が未だに存在していることも事実です。この現状を止めることができるのは被爆国の私たちだと思いませんか。八十一年前の大きな衝撃が二度と起きないために、私に出来ることは、より多くの人にこの貴重な経験を伝えていくことだと思いました。

東部中学校　２年３組　　五味　芯太郎

僕は今回の「広島平和の旅」で、戦争に対する人々の思いを知り、戦争の過去と未来に対する現実を学んだ。一日目、平和記念公園内にある平和記念資料館を訪れた。資料館内には大勢の人がおり、外国人の方もたくさんいた。展示室は、このような見出しで始まっていた。―「失われた人々の暮らし」。その名の通り、展示内容は残酷なものやショックを受けるようなものがほとんどだった。数々の凄惨な写真が、僕に現実を突きつけてきた。それと同時に、僕は「逃げてはいけない」とも思った。そうしなければ、僕がこの場所に来た意味が無くなってしまう。僕は、他の人達と写真を一枚一枚カメラに収めながら、展示室を進んだ。出てきた時は、今までに感じたことのない感情が、僕の心の中で渦巻いていた。展示内容で、僕の心に一番残ったものがある。原爆によって傷を負った人々が、橋に集まっている写真で、その横にこんな文章があった。「御幸橋には大火傷を負って逃れてきた負傷者が群がっていた。カメラを構えたが、シャッターが切れない。二十分ほどためらい、やっとの思いで、一枚目のシャッターを切った。」実際に写真を撮ったカメラマンの証言だった。この文章を見て、今、僕達がこのような経験ができているのは、原爆の記憶を後世に残そうとした人々のおかげなんだ、と深く実感した。

二日目、僕達は被爆体験者の人達と交流を行った。僕は、母親の胎内で被爆された石井和子さんという方の証言を聞いた。石井さんの母親は、広島で原爆投下後に行方不明になってしまった石井さんの父親を探すため、被爆地に赴き、被爆されたのだという。原爆の被害を受けた人の中には、直接被爆した人だけではなく、石井さんのような人達もいるという事実を知ることができ、とても貴重な体験だった。

僕は、平和学習の作文で「人と兵器の違い」を書いた。そして「広島平和の旅」では、戦争に対する人々の思いを知ることができたように思う。平和記念資料館では原爆・戦争に対する人々の怒りや悲しみ、平和記念式典と被爆者証言の集いでは未来への祈りや平和への希望という思いがあった。戦争に対する人々の思いはそれぞれ違うかもしれないが、平和を願う気持ちは変わらないということを、今回の旅で学ぶことができた。僕は、世界を平和に近付けていくことは、自分達の役目だと感じている。今回感じたこと、学んだことを決して忘れず、身近な人達にも共有していきたい。もう絶対に、核浜器によって悲しむ人が生まれないように。

平和への誓い（令和８年広島平和記念式典より）

もしも「大切なもの」が一瞬で消えてしまったら、
どんな気持ちになるのでしょうか。

私たちが笑い合っているときにも、尊い命が失われている現状があります。
今もどこかで、当たり前の日常がうばわれています。

ぼろぼろになった制服。
黒く焦げたお弁当箱。
それは、当たり前の毎日を生きていた証です。
昭和 20 年（1945 年）８月６日、午前８時 15 分。
たった一発の原子爆弾が、人々の暮らしを、人生を地獄に変えました。
髪は焼けちぢれ、全身の火ぶくれが破れ、火傷した皮膚が垂れ下がった人々。
「痛いよ。苦しいよ。」
「助けて、お母さん。」
「死にたくない。」
「助けてあげられなくてごめん。」
死んでしまうつらさ、生き続ける苦しみは、想像することさえ恐ろしいことです。

私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、
当時の記憶を事実として受け止める使命があります。
目をそらさず、知ろうとすること。
悲しい現実でも向き合うこと。
そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。

私たちには、広島のこどもとして、行動する責任があります。
相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。
平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。
一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。

平和とは、誰かからあたえられるものでなく、世界中の人々で創り上げるものです。
こどもである私たちも、その一員として平和への一歩を踏み出します。
かけがえのない「大切なもの」を、確かな希望を、未来へ届けるために。

令和８年（2026 年）８月６日

こども代表
広島市立高須小学校　６年　柿崎　由宇
広島市立高南小学校　６年　河野　和希